

あを 7

2017



たぶつもと、
河馬
夏の河馬

秘典



あそ

七 月



枇杷

聖夜劇子を産みて抱く孫娘
東電と秋山ちえ子花子の忌
あのときの冬雨ねむりのなかにまで
白梅ほっほ紅梅ほっほ妻むっほ
庭の枇杷わたしがゐるやうに剥く

東京

佐藤 喜孝

五月雨

埼玉

大日向幸江

五月雨や声押し殺し鳴く鴉
未来へと舟を出したる天の川
青ぶだう斑に透けるガラス窓
夏服や大股で行く駅の径
山陰の夏や人より先に海



千葉

黒澤 佳子

小窓

散り出した桜惜しむや今朝の雨
小窓から見通す桜夕日浴び
行き渡る風は皇居や花八分
菜の花や遠目に人のてんと
千鳥ヶ淵水面明るし花筏

東京

七郎衛門吉保

五月連休

八十八夜ことり逝く夜に銀の櫂
改憲になかにし礼の叛旗あり
青浅黄老深若のみどりの日
鯉のぼりない町寂し高齢化
立夏かな玻璃の器に茶を点てり

東京

篠田 純子

青嵐

いちにちぢうハンドスピナー青嵐
往来に草鞋片方祭あと
ゴールデンウィーク明け涙目の一歳児
手押車に園児六人風青し
青嵐J・アラートかと身構へり

石川

定梶じょう

已むなく

ものなべて旧りゆき今の虹光る
憲法の記念日も蟹よこ走る
羞ぢらへるやうなりあやめ雨上がり
縦笛や麦秋童子瞼とぢ
白波が寄する已むなく鵜はくぐる



埼玉

須賀 敏子

五月場所

急変の空に向かつて黒揚羽
始祖鳥の化石に見入る夏始
楠若葉きこきこきこと一輪車
去年まで新茶送りし友の居ぬ
五月場所北勝富士は大^{だい}輝^きくん

東京

田中 藤穂

悼

慰めの言葉浮かばず瓜刻む
立浪草あらがひがたく月日去る
柿若葉大声のまま逝かれけり
立ち上れ立ちなほれ大雨の麦
鳴子百合葉蔭に咲きてうすみどり

三重

長崎 桂子

葉桜

葉桜や行交ふ人は笑み交す
葉桜に前向く気持しづしづと
葉桜の道は朝夕安否問ふ
馴染みなる急須の割るる潯暑かな
人住まぬカラフルな夏の草花

東京

森 なほ子

五月

紙飛行機五月の空を滑りゆく
新^{追悼}緑の最も目立つ裏通り
言の葉に遊びし人や青嵐
歌ふこと好きな男の子や五月くる
子らの声絶えたる里の鯉幟



東京

赤座典子

秩父旅

青嵐 S L の乗る 転車台
束の間のパパの休息 夏燕
青が好き舌を真青に欠氷
兄妹飽きず飛込む夏布団
蠟梅や紡錘の実を突出して

埼玉

秋川 泉

春惜しむ

亀鳴くや用事そのまま日の暮るる
日翳りてヒヤシンスの香流れをり
ケンケンと休耕田の雉の群
遠くより詫び状の来る春の雷
酸葉かむ子の口元がすばまれり

東京

石森 理和

母の日

母の日は戴くばかり墓参り
人気無き社をぐるり橐吾の花
繭新芽生垣見事 紅色に
目覚しは鶯しばし聞き続け
聞きなれぬ言の葉箱根の春に舞ふ

山梨

井上 石動

雑詠

齒磨のすがし残り香ご来迎
浜木綿や沖の奥処に日が沈む
夕べ星甲斐善光寺青葉風
小袋を提げて二人や京の夏
夏蝶のみるみる空の彼方まで



病院は大きなおぼろ夜はなほ 佐藤喜孝

透け見ゆる土手の夕暮れ木芽和 井上石動

峠七つ越えて埼玉花嵐 大日向幸江

回収船花びら掬ふ目黒川 黒澤佳子

掃き集め小山なしたる紅椿 七郎衛門吉保

地下吹抜けの樹より地上へ花ふぶき 篠田純子

欲の字の旁りがあくび春蘭けて 定梶じょう

単線や時に特急諸葛菜 須賀敏子

かげろへるものに赤子の蒙古斑 竹内弘子

宙深く吸はるる落花モーツアルト 田中藤穂

花を待ち早くり出すやカルテット 長崎桂子

天地も老いもさくらふぶきの渦中なり 早崎泰江

入り江の青沖のうす青花菜畑 森なほ子

たんぽぽの絮捧げゆく二人組 赤座典子

鉄平石ふみゆく句会むべの花 秋川 泉

大阪の大川春の陽光に 石森理和

喜孝抄



五月号作品より

秋川泉・森なほ子・佐藤喜孝

落ち蟬に動かぬものと動くもの

佐藤 喜孝

晩夏の林などにあちらこちらに蟬が落ちています。死んでいるのかと触れると、突然バタバと羽ばたき驚かされます。全く動かないもの、かろうじて脚を動かすもの、いずれは皆動かなくなるのだが。そんな落ちゼミをドライに観察しました。蟬自体がドライですから。(なほ子)

春の鹿に見つめられては動かれず

井上 石動

その昔、近鉄奈良駅前で真つ直ぐに一頭の鹿が歩んできてわたしの前で止まった。まるで「お迎えにあがりました」と云うように。その澄んだ愛くるしい瞳にみつめられ感動して鹿と共に奈良公園へ。あの時の鹿の瞳を思い出しました。

作者も見つめられて動かれず見つめ合っていた事でしょう。(泉)

山水をパイプで引いて芹豊か

大日向幸江

冷たい山の水を引いて育てるみずみずしい芹、その緑、なんとも涼しそうでおいしそうです。パイプに目を留められたのもいいと思います。(なほ子)

輝やペットボトルの蓋回す

黒澤 佳子

お料理など台所仕事を沢山なさる作者。輝で指先が痛いことでしょう。そんな時、ペットボトルの蓋を回すことは、息を大きく吸ってエイ!という気分です。その感覚がこの句から伝わってきます。(泉)

ガスコンロ新しくして桜鯛

七郎衛門吉保

長年使ったガスコンロ、ついに新しくして気持ちよし!使い初めにいざ桜鯛、焼きましたか、煮ましたか?ピカピカのコンロに相応しい美しい桜鯛です。心の弾みが伝わるよい句だと思います。(なほ子)

ほほほおーんと梅を見上げる笠智衆

篠田 純子

オノマトベに個性を発揮される純子さんです。今回もほほおーんの一語であの笠智衆ののどかな顔と声がまざまざと浮かびました。オノマトベの威力は絶大、誰にも出来るものではありませんが。(なほ子)

まだあったかい手の卵

定梶じょう

冬の輪島の寒さは、関東とは異なっただずし

りとしたものでしょう。産みたての卵を両手でつつんでそのぬくもりをしみじみと私も感じる事が出来ました。冬の日々がたしかにある。そのことがしつかりと伝って参ります。(泉)

緑啄木鳥を追ふ夫の背や光る風

須賀 敏子

ご夫妻でよく自然を訪ねておられるようです。今回はあおげらを発見、その姿を追ってご主人がどんどん行ってしまうので、離れては大変と、一生懸命その背を追う作者。光る風の季語が決まっています。(なほ子)

満天星の花が目じるし母の墓

竹内 弘子

御母様の墓前に行かれた作者は灯をたくさんつけた満天星の花々に迎えられた。まるで御母様が作者を待っていて下さったように。心あたたまる作品です。(泉)

春雲仏像展にゆくつもり

田中 藤穂

春の朝、雲が降って来た。「あらあら寒いけれど今日は仏像展に行きましょうーあの仏像に逢いたいから…」と楽しい気持ちの作者です。(泉)

「……………をした」俳句は普通だが、これからおきるかどうか分からぬ俳句で惹きつけられるのは珍しい。「つもり」がふつくらとした情緒を演出してゐる。結局は「寒いから今日は止めよう」となったやうな気がすると思ふ偏屈な鑑賞者である。(喜孝)

春一番芥と帽子に悲鳴とが

長崎 桂子

春一番ってこのとうりですよ。いきいきと言ひ表しているとおもいました。ドラマの一場面のようです。(なほ子)

卒業の子らコンビニに屯せる

森 なほ子

卒業式の後別れ難く、離れ難く子供達はコンビニの駐車場辺りで話し込んでいる。その気分も風景もとても良く分かります。中学生位でしょうか。もう明日からは学校では会えないのだから。もう今日でそれぞれの進路に分かれるのだから。でもね、また会って話しをしようネ。そんな声が聞こえて来ます。(泉)

春時雨雨傘を使はぬ小学生

赤座 典子

元気な男の子。明るい午後。下校時でしょうか。ふいに降り出した雨、止みそうでもあり、男の子は手に持っている傘を開きません。どこか雨に濡れることが楽しげで元氣良くスタスタと歩いて行きました。(泉)

古い猫の肉球柔し春暖炉

秋川 泉

老いても猫の肉球は若猫と同じに柔らかいのです。季語が春炬燵だと平凡な日常的光景になりますが、春暖炉にしたことで堂々とした句になったのだと思います。暖炉の硬質が肉球の柔らかさを際立たせています。この猫は在来日本種の三毛ではなくて、おしゃれな洋種にないそうです。(なほ子)

茎低く庭のフリージア眩い黄

石森 理和

庭のフリージアは花屋のフリージアのように茎長くすなりとはいきません。でも自分で育てた花は寸足らずでもいとおしいもの。眩い黄色が庭の一角を明るくしています。(なほ子)



あをキーワード俳句辞典（ととーなか）

整ふ

月を得て寒夜の眠り整へり
すきやきを整へてさて独りかな
茄子胡瓜やつと整ふ初出荷
一休み爪整へる大晦日
お抹茶に息整へる花衣
薑を良く食べ体調整へり

隣組

戦時下に兎追ふ山隣組

怒涛

世のために役立たぬ身や夏怒涛
帰ること忘れて見入る冬怒涛

都々逸

福笑それから都々逸炭坑節

利根

とのぐもる麦秋の利根滓火けぶる
利根川の草木は枯れて布団見ゆ
大利根の戸をあげはなつさくらかな
菜の花や利根東遷の昔より
利根川の鉄橋越ゆる野蒜かな
花曇利根川蛇行遠ざかる
古利根に鳴きてをり今朝の冬

苗場

直す

春スキー苗場谷川八海山
空き稲架の縄をきりりと締め直す
唐がらし優しい眉に描き直す
晩夏光敗者の直す靴の紐
観劇や梅雨のさ中の氣を直す
眼鏡のつる直す用あり寒の雨
つぼすみれ幾度も直す靴の紐
出納簿何度も遣り直す溽暑
萎ゆる氣を仕切り直すや春隣
綻びを直すに時間冬の雲

直会

秋まつり果ての直会三拍子

波折り

冬夕焼波折の色のとめどなく

中

美容院鏡の中の実千両
百態の黄葉の着地夕日中
伝えたきレシビの中に雛の寿司
冬うらら葬花かつがれ村の中

須賀 敏子

栢森 定男

篠田 純子

赤座 典子

長崎 桂子

竹内 弘子

森山のりこ

長崎 桂子

斉藤 裕子

田中 藤穂

芝宮須磨子

佐藤 恭子

後藤 志づ

松本 米子

須賀 敏子

鈴木多枝子

ひらひらと目白と夫と花の中
雑音の中の静けさ鳥さかる
燃え尽くす野火一切の凝視の中
墓夢の中まで憤る
夢の中架空の街に梅雨滂沱
町中に刑務所のある金木犀
ゆつくりと光の中に木の葉散る
十三夜鏡の中にねる少年
冬茜明日も同じ風の中
風の中縮みて散れる冬薔薇
初富士のてのひらの中三ツ峠
枯の中何か言はねば吾も枯れむ
深川めし芭蕉は花の中に消ゆ
花疲れ鏡の中に膝くづす
草原を逃れて逃水森の中
松の芯心の中をかいまみし
溢れさせビール飲む夫夢の中
初茸や小笹の中の風の音
霧の中リフト行き交ふ気配あり
眼の中の蚊追ひ払へずも秋澄みぬ
梅挿すや清貧に処す反故の中
探すもの忘れて日のなか梅の中

石森 理和

渡辺 京子

渡辺 友七

東 亜 未

芝宮須磨子

堀内 一郎

渡辺 京子

佐藤 恭子

須賀 敏子

山莊 慶子

須賀 敏子

渡邊 友七

堀内 一郎

田中 藤穂

芝 尚子

山莊 慶子

芝宮須磨子

関口 ゆき

鎌倉喜久恵

早崎 泰江

王 岩

佐藤 恭子

桜咲く夢の中までさくらさく

春愁や臓器の中に隠しごと

噴水の光の中に人の影

父の日や父の中なるピーターパン

渋滞に遇ひしたつぷり虹の中

田の中の圓墳寒風渦巻けり

SLの終着駅は新樹中

卵酒布団の中で読む句集

家中に力ナリアの聲春の雪

街中に眠れぬ夜や傾れ雪

釘箱の中の折り尺昭和の日

西日中早稲田通りをデモ行進

梅雨入や画廊の金魚絵の中に

夏の朝鏡の中に母を観る

東御苑の中の茶畑夏の雲

雨の中次々浮かぶ五山の火

老女背高し色なき風の中

灰暮れし橋の真中に酔ひさます

珈琲を飲めば枯葉の音の中

蠟石の丸の中から出ない冬

冬晴や釣舟の中よく乾き

ひと込みの中のひとりの冬銀河

早崎 泰江

須賀 敏子

石森 理和

篠田 純子

早崎 泰江

長崎 桂子

森山のりこ

齊藤 裕子

佐藤 喜孝

七郎衛門吉保

中川句寿夫

赤座 典子

石森 理和

秋川 泉

田中 藤穂

秋 泉

森 なほ子

佐藤 恭子

井上 石動

佐藤 喜孝

森 なほ子

定梶じょう



佐藤喜孝

大日向幸江

心太せせらぎの音立てて食ぶ
遠雷や風の漕ぎ出すブランコの
シャンパンの泡になりたる夜の海月
夏の夜や軽めに済ます晩御飯
裾たくし上げ浪と戯れ夏服の

「心太」。心太を見て、聞いて、味わう。涼感を呼ぶ句。
テレビタレントがものを口にいれ囁むか囁まぬ間に「う
まーい！」と大声を上げるはしたなさに較べると断然こ
ちらの方が美味である。「立てて」は音量がすこし大き
いかも。

「シャンパンの」。海月をシャンパンの泡に見立てる、
幸江さんらしい感覚。「夜の海月」は自然界をおもふ。「夜」

とことわらなければ水族館でゆつくりと上下する海月が
浮かぶ。「晩御飯」と云ひ今は食に拘った作品が目
付いた。

ほかに「の」で終はるものが二句あった。不安定な句
すがたが狙いかもされないが、「ブランコを風が漕ぎ出
す遠き雷」「夏服の裾たくし上げ浪と戯れ」と常識な線
から推敲されてはいかがであらう。

青蜜柑アンモナイトをなで手の 中原幸子
水着出すところ閉ざしてゐた頃の 櫛未知子

七郎衛門吉保

絵の具箱ひっくり返したごとと躑躅
タンポポの絮追ふ鳥のホバリング
源流地緑の匂と熊注意
旧暦にはためく幟秩父里
ダービーやわが人生の草競馬

「タンポポの」。日本にホバリングをする小鳥がゐるの
かと不思議に思ったが居るとのこと。日頃の観察の賜、
うらやましい光景に出会ったものだ。

「絵の具箱」。躑躅のさまざまな色で咲き乱れてゐるの
だとは分かる。が、素直すぎた感がある。「ごと」は省
略できる。参考までに

絵の具箱ひっくり返す春が来た 麻生圭佑子

篠田 純子

木下闇試し聴きするJ・アラート
卯の花腐し面接官のキツネ目で
溜め息のあと深呼吸吸花十葉
観覧車に緑の灯水温む
いつまでも芒とイッつ驚春日影

「木下闇」。このごろ世事に疎くなったわたしには恥ず
かしながら「J・アラート」とはなんぞやと調べてみた。
内閣官房「国民保護ポータルサイト」なるところに「北
朝鮮から発射された弾道ミサイルが日本に飛来する可能
性がある場合における全国瞬時警報システム（Jアラ
ート）による情報伝達について」

とあった。少し分かった。しかし、日本人に知らせるつ

もりなら日本人に分かるやうに書けばよいのに。「空襲
警報」なら一目了解である。それにしても北朝鮮以外か
らの飛来はなんと云ふのだらう。「ポータルサイト」も
分らないが面倒で調べる気にもならない。
このやうなものを試し聴きする機会があったのであら
う。盛夏の季語がなんとも怖ろしい。

定梶じょう

母音とは子音とは梅枝垂れけり
労働祭電車警笛鳴らしあふ
竿売がさりあゝ夏だなと思ふ
いつ迄も残る夕焼の朱がいとし
山びこや森のきくらげ耳すまし

「母音とは」。じょうさんがどう云ふことで母音子音に
拘っているのか門外漢には見当が付かない。とりあへず
梅は枝垂れてゐるのである。この間合が分からぬ者にも
おもしろい。

「竿売が」。物干し竿は買ひに行くには持てあます代物。
さういへばわが町では全く物売りの声を聞かなくなっ

た。焼き諸屋さんが最期ではなかった。廃品回収業者のスピーカー音はいまもときをり聞くが、「くずやくおはらい」の昔日の肉声には遠く及ばない。そのやうな音が去ったあと、ふと「夏だな」と思った。なぜか納得させられた季節への感覚である。

「いつ迄も」。刻刻と変容する夕焼け、じょうさんは夕焼けといふよりその「朱」の色彩に惹かれてゐる。空一面の夕焼けの大競演も時刻が来るとすると色あせてくる。しかしじょうさんには何時までも残るのである。「いつく」く。

田中 藤穂

柳川や枳殻は花散りしあと
列車過ぐる青葉の須磨を目交に
青嵐や高野みやげの榎みどり
駿河路は新茶の幟はためきて
新茶買ふおまけの袋詰め蜜柑

柳川・須磨・高野・駿河と絵巻物のやうに地名が歌はれてゐます。俳枕を詠むのはなかなか難しい。どうして

も名前負けして情緒に流されやすいものです。読む感動が伝はらなくとも、詠むものはとても気持ちの良いものです。「新茶買ふ」の句のみ地名は読み込まれてゐません。皮肉なことにこの句が一番生き生きとしてゐました。

長崎 桂子

新緑や厳めしい昭和のポスト
赤い屋根煉瓦の囲む茂りかな
若みどり背伸びのみどり夏に入る
萬緑に車の往来人氣無し
萬緑や薔黒青ねずみ色

「萬緑に」。某テレビ番組ではないが「第一村人発見」ではないが、地方に行くとき歩いてゐる人を見かけることが少ない。そんな中自動車は頻繁に往来してゐる。本来これも人の移動であるから、人氣無しではないのだが、人氣無しなのである。現代社会に不安感を抱いてゐる作者である。

赤座 典子

日雷登場促すドラムソロ
クレコートそそぐと食むバナナかな
取りたての夏野菜はや紙湿る
巢作りを終へて見守る日の盛
木耳や目立たぬが良き時のあり

「日雷」。日雷のはじまりをドラムソロだと、これから夏本番の開幕を告げるドラムソロである。
「取りたての」。夏野菜の鮮度を脇役の紙の「はや湿り」で納得させた句。ベテランの作品である。

秋川 泉

新緑や写経奉納高野山
石楠花の金剛峯寺は雨の中
夏の寺高野槇買ふ参拝者
ひこにゃんに夏つばめ舞ふ彦根城
つつじ咲く小路をたどり建仁寺

「新緑や」。ひらがなは「や」の切れ字のみ。期せずしてか意図してかはともかく口に誦してしてみると経文のごとくである。新緑に包まれ写経三昧、得難いひととき

を過ごされた。「石楠花の」「つつじ咲く」は無難に仕上がってゐるがそれまでといふ感があるのがおしい。

石森 理和

母の日の花をつまみに微酔に
四十のお揚げを開く明早し
お稻荷さん五月に落ち着く運動会
田に水の張られ始めし東海道
新緑の急坂五分水平線

「母の日の」。母の日はお祝いをする立場だと思つていたが、いつのまにやら祝ふ人が一人も居ないことに気がつく日が来た。お祝ひに戴いた花を眺めながらの一杯、なんとも複雑な思ひのほろ酔ひであることか。

定梶じょうさんから引き継いでの「はしたて集」。不慣れなので大分時間を使つてしまった。あらためてじょうさんのご厚意に甘えてゐたことを知った。じょうさんがアットホームな「はしたて集」に育てて下さったのでこの点を大切にしたいと考へてゐる。順位を付ける意図

は全くないので、掲載順は気にせずとも良い。わたしと
 投句者の会話の場として読んで頂ければありがたい。い
 まここに佐藤恭子の名がない。淋しさの反面ほつとして
 あるわたしがゐる。佐藤恭子の俳句にどのやうなことを
 書くわたしがゐたのか、わたしにも興味があるが。



比来披見

ホトトギス 六月号	似合はぬというてをられぬ夏帽子	稲畑 汀子
軽暖の江東区民てふ歩幅		稲畑 廣太郎
沖 六月号	鯉幟早瀬の灘を旨指したり	能村 研三
雨月 六月号	幼稚園はお休み桜満開に	大橋 暁
槐 六月号	佐保姫にさへも渡せぬ命なり	高橋 将夫
馬酔木 六月号	此やこの又三郎かも春ならひ	徳田千鶴子
風土 六月号	日翳るや水のゆらりと鱗になる	南 うみを
京鹿子 六月号	のそつと来きりんの口舌園薄暑	鈴鹿 呂仁
六花 六月号	田搔機の音の中なる鐘をつく	山田 六甲
万象 六月号	春ならひけふも眼鏡の行方かな	大坪 景章
京劇の袖長きかな春の夜		内海 良太
春燈 六月号	裏窓に鶯聞くや民家園	安立 公彦
鳴 六月号	「おん爺」とよばれ薇綿毛濃し	高橋 道子



喜孝抄

末黒野 六月号	鶯や父祖の墓域へ声ゆたか	小川 玉泉
	畑焼く人流れに鍬を浸しおき	松本三千夫
雲の峰 六月号		
菓舗にも小間物屋にも燕の巢		朝妻 力
萱 六月号		
踏み切りの岩のきざはし鳥雲に		木村 嘉男
花冷えや臆病者の向かう傷		亀田虎童子
技芸山房大きな春火鉢ありぬ		小島 良子
こだま 五月号		
枕草子ならぬ絵草紙暑氣中り		松林 尚志
光陰		大山 夏子
てのひらへ映る青色濃紫陽花		
もの忘れしているような螢の夜		
みんなの初鳴き今日は日曜日		
夾竹桃残花点滴数えいて		
昔宿場清冽に湧くあきつ		
青空の真んまんに揚雲雀		
町という集落に入る夏帽子		
青棚田スイッチバックの停車場		
鬼灯市おわるこの頃耳遠く		
十六夜や夫病院に眠るころ		
いち二枚刈田の上を雲の影		
紅も黄もはげしき彩に冬紅葉		

毎月15日発売
定価100円(税別)

月刊 **俳句界** 2017年8月号

【巻頭語】
○葉 佐田龍樹

○ベクトル 国光六四三

○カタカナ松田龍雄

○エロス斎藤孝子

【特集】
あるのか？ ●豊田孝子

○二重唱とたもと ●切れ手斎藤

たれい斎藤孝子

○三股切れ 斎藤孝子

ききと俳句界NORW 能村研三

【俳句】 宇多喜代子

杉田久女と橋本多佳子
「二人が愛した小倉」

○九州州報編集局内○久木と佐子代橋

○作中登場人物二人を基に●橋本多佳子

○エッセイ 橋本多佳子 石川一歩

中々レモン出版社「水鏡」阿部王二

【俳句】 葉井龍一「俳句」

○佐田龍樹の「目録」と「シニター」

清水まり子「俳句」

第一巻定価100円(税別)です。

株式会社文学の森

03-6262-9196 URL: <http://www.junghe.com>

佐藤喜孝 著

青寫眞

を読む

この連載の始まったのは二〇〇三年一月号からです。それから十四年経ちました。佐藤恭子追悼の意を込めもう一度読み返したくなりました。再録お許し下さい。なほ「<http://www.haisi.com/tosho/aoshashin.pdf>」にて全文読むことができます。

佐藤喜孝

『青寫眞』佐藤喜孝の第一句集である。今から二十二年前四十歳になったときに上梓された。それ以後、今日までの二十余年第二句集は出されていない。忙しかった

小学校へ行く前、田舎に疎開をしていた。祖父が飼っている鶏（卵を食べるため）、朝暗いうちから大騒ぎをしていない。最初はうるさくて「にわとりのバカ！」と言いつつ眠いのを我慢して暗いうちに起きたものだ。それも何時しか慣れてしまい陽が高くあがっても眠れるものだ。

この句十二月三十二日に鶏が天を翔けていると言っている。大晦日と元日の間に三十二日という刻が作者にはあったのだ。何ものにも束縛されない時間を鶏は天空をばたいている。勿論作者自身でもある。羽のある生き物は本来とび廻ることが出来るのだが、家畜となつてしまった鶏にはそれが出来ない。ところが十二月三十二日には翔けまわっていた。ここが俳句の面白さである。作者の近作に「初雪や天女にもある土踏まず」という句がある。天女は地を歩くことはないの土踏まずは要らない。しかし鶏も、天女も自分と同じ生き物としての同じ処に立つてのやさしさが作句する上にあらわれてくるところかも知れない。何年か前に見たテレビで放し飼いにしている農園の鶏は高い木の天辺で時を告げていた。

佐藤 恭子



のか、敢えて強い意志で出さなかったものであろうか。十代から作句を始めたようだが諸先輩の中でお酒も覚えたようだ。

昨年ある機会に読み返してみた。二十年たった今、昨日今日創ったように新鮮であった。

では二十年前はまだ生であつたのかといわれてしまいかも知れないが、二十年たった今も色あせないで共鳴できること、大切なことだとも思つて誌上で鑑賞させていただくことにした。

天翔る鶏十二月卅二日

初笑 右向け 右で 右を 向き

昭和十六年生まれの作者には軍隊経験はないはずである。この句もそうだが戦争に行つたことがない故に外側から冷静に見られるのかも知れない。これも又最近の作に「右靴が一斉に鳴り寒桜」がある。「全体止まれ！ 右向け右」と号令一括、隊列の糸乱れぬ様子が最近ではよく北朝鮮のテレビで映し出されている。日本でも大戦前はそんな光景が日常茶飯事であつた。軍隊はもちろんのこと学校でも町内会でも……。

右を向けと言われ意思を表すことなく右を向いてしまった。向かされてしまったのかも知れない。自ら向いた人も居たかも知れない。この句の怖ろしさは初笑いである。何故ここに初笑いが来たのか。

祖母や父から一月一日の朝になると「一年の計は元旦にあり」から始まつて何故元旦は大切なのかを子供の頃から聞かされてきた。初笑い影の右向け右である。2003年早々世の中が何故かざわついてきている。右向け右で左を向きたい衝動に駆られるかも……。鑑賞した今回の句もそうだが、季語の大事さがどんなに大切

なものかがはつきりとわかる。

薄氷を割らむと片足立ちをせり
せきれひやうすのひのはしみづががのる

二句とも薄氷を詠んでいる。ところが同じ薄氷でもはつきりと気温の違いが出ている。

一句目は春といってもまだまだ気温が低く氷が溶けないである。

しかし冬に張った氷と違って厚さは薄い。見た目にもそれとはつきり分かる。

道路の凹みにでも張ったのであろうか。ふと割ってみなくなってしまった。割ろうとしたときにとった行動が片足立ちである。片一方の足に全体重をかけて薄く張った氷の上に乗った。薄く張った氷は見事に割れ、いくつもの透明な美しい破片がうまれた。

一本足になってびよんと飛び上がっている姿が目の前に想像でき、人それぞれにいろんな思いを抱かせる句である。

また二句目は、川なのであろうか。鵜飼と言っている。

舟呼ぶやせの土手に灯を振りて
岩の水受けて手水や秋の宿
夕時や月未だなる船出して
古びたる父の俳諧癡茶心
秋扇捨つべく持て或日かな
人妻にして姪生や秋海棠
蚊も蠅もぬる秋風の住居な
城外にのびて人家や稲の秋

押しつけて梨を勧める老人かな
生徒等に圍まれ飽ふ野菊かな
小夜砧いよいよ遠きひとかな
奏樂に俗めく寺や夕紅葉
冬寺のたひそとあるばかりかな
水鳥や時化を灯りて岸の家
枯草や廟の門が落ちしまま
葱塗へて傘を返しに車りけり

2

葱掘るや移り香既に手にあつて
傷面の相思ひ見る火鉢かな
餘命知る病となりし蒲團な
出勤や出合話によべの火事
双六の相手そこらに誘ひけり
繪双六済めば行くべき使かな
寒菊や煙り燃ゆる外かまこ
梅宿や昔ながらの歌屏風

古雛を飾りてよるべき身かな
春雨やうすくれなるの桐桐身
傭はれて人の田を打つばかりかな
この煙も打ちてへ黒鯛さうり
落椿掃いて閑めたる廟廟かな
花壇の京に着くべく燈はかり
花もはや散るばかりなる秋苑かな
春の蚊の灯る障子離れけり

雀よりすこし大きく尾が長い。遠くから見ても鵜飼とよくわかるのは、あの長い尾を上下にいつも動かし水辺や谷川を飛び渡っている。尾を上下に動かしているの石たたき、庭たたきとも言われている。薄氷の上に水が乗ると読まれている。鵜飼が乗って水が氷の上にあがつたと読めないこともないが、あたたかくなった日に端の方から溶けはじめてきた氷の状態と読んだ方がいいのではないかな。

川や湖に張っていた氷がいつの間にか端の方から水になっっているのを見たり、テレビに映し出されたものを見たことがある。

張った氷は端の方から溶けていくというのは、潜在意識の中では持っていたが「みづがのる」といわれてみると溶けはじめてきたときに、確かに氷の上に水がのっかっている。温かくなつた春の日の出来事である。

そういえば屋上にあるバケツに丸く出来た氷はだんだんと小さな円になつて端の方から溶けていつている。やつぱり水の方が上になつていた。

薄氷ひとつとっても趣や、時間の動きがそれぞれの句にあつて楽しい。

あとがき

わが家に「借りぐらし」が棲み着いたらしい。「借りぐらし」の名前は知らないがどうもわたしと趣味嗜好が似てゐるらしい。わたしのだいじだなと思つてゐるものを借りてゆく。数日でぴよんと戻しておいてくれるが、中には長いものもある。不馴れな生活の変化からの隙間に「借りぐらし」が巣くつたらしい。アリエッティのやうに可愛らしいのだったらよいのだが……：原稿はいろいろな方法で送られてくる。今までいかに煩雑なことを任せつきりだったと反省。原稿の扱いを①EXはすぐにプリントする。②メール、これもすぐにプリントする。③郵送（複製を取り別に保管）これで原稿の散逸を防ぐ、つもり。

ご芳志多謝

篠田 純子 様
田中 藤穂 様

会費などの送金先を郵便振替を廃止し、左記の口座に変更お願いします。

ゆうちょ銀行

店名・店番 〇一八

普通預金

口座番号 4586402

佐藤 喜孝（サトウ ヨシタカ）

（喜孝）

二〇一七年七月号

発行日 七月十二日

発行所 東京都中野区中央2-50-3

電話 090-9828-4244

ファックス 03-3371-4623

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット／松村美智子・ティリ エイマ

会費 一〇〇〇〇円（送料共）／一年

ゆうちょ銀行（普）（店番018）4586402
佐藤 喜孝（サトウ ヨシタカ）